

最後の淋^{さみ}しい猫

北村想

もちろん、わたしたちは個人的には「遠野物語」の山人譚から個体の入眠幻覚と個体の出離感覚が描き出した多彩な幻想と哀切な別離感を読みとることができる。しかし酔うことはできない。

わたしたちもまた現代にふさわしい固有の禁制の世界をあまりみだし、それにかこまれて身をしめつけられているからである。

「吉本隆明 共同幻想論」

銀河そのものが、果てしない膨張を続けているという。

このおそるべき拡散、非凝縮の時代に一枚の風景写真を世界と対峙させてみよう。

タイトルは 最後の淋しい猫

「加藤吉治郎 最後の淋しい猫」

登場人物

チンドン屋の親方||猿又弁吉

その娘||デン子

デン子の兄||六

座敷牢のアリス

田所天助

青木

北風万石

お役所の課長

医師

声

パジャマ猫

アリスの母
娘たち

お役所の職員たち

きれぎれのプロロオグ

1 地下室

音楽はジェフ・ベックのバラードが良い。

何処かの地下室であると思われる。

ろうそくの灯がジジリッと点っていて。ポタリポタリと水の落ちる音も聞こえる。

夏。であるらしい。

ランニングシャツの男が一人、スコープのついた小銃を抱いて坐っている。

汗。濡れた肌。冷たそうな指が、足もとの本をめくる。

旧約聖書・・・？

音読する。「注・旧約には正しくはこれから読まれるとおりに記載された箇所はない」

男 雨は四十日四十夜、間断なく降り続き、雨が降り止んでからも百五十日の間、水は地上に氾濫した。さて方舟の中にはすべての生き物が一つがいつと、潔いけもの七つがいと日常の食糧が積まれてあったが、丁度二十日たったある日から困ったことが始まった。繁殖力の強いねずみが増えはじめて、食糧を食い荒らし、ついには方舟にさえ、その歯で穴をあけはじめたのである。この予想もしなかった災難にノアは困り果てて、さてどうしたものかと百獣の王ライオンに相談した。

ライオンはノアの言葉にコックリとうなずくと、その鼻の穴から小さなライオンを一つがいに外に出した。これが猫である。

猫はかくして、ねずみを捕る目的をもって、方舟の中において誕生したのである。

しかし、ねずみが居無くなるや猫はとたんに・・・

音楽がとぎれる。ラジオから流れていたのらしい。
ニュースが始まる。

ニュース では今日最後のニュースをお伝えいたします。最近都内で頻繁に起こっておりますテロ事件の犯人は、目撃者の証言や現場のようす等から、先だって近県の精神病院を脱走した入院患者の・・・

男、ラジオのスイッチを切る。

本をとる。ろうそくを吹き消す。

暗転

2 アララット山頂

場所はさだかでないが、何処かの山岳部であるらしく霧が流れている。

着物姿の娘たちが多勢、男を一人かこんでシクシク泣いている。

男が立ちあがった。まるで荒野のキリストかシナイ山のモ―ゼかといったふう。

男が大芝居的に語り出す。

男 泣くなアツ― 泣くなアツ、娘たちよ。泣いたらあかん。こここそ、この地こそアララットの山頂ぞ。・・・もう終わった。方舟はアララット山の頂上に流れついたんや。とうとう難破してもうたんや。みんな、ひきずりおろされてしまうやろ。世間では、わしのことを女衞やと思うとる。わしが、なんぼ説明してもあかんやろ。わしらは何にも悪いことはやっとな。がしかし、世間には世間の世界ちゅうもんがあるのんや。しゃあないのや。言うてみたら、世間は血で、わしらは骨や。同じ人間を作っとるもんだはあるんやが、全然別のもんや・・・さ、もう泣くのはやめんかい。これからは一人でやっていかなあかんのや。

娘たち、口々に、おっちゃん、おっちゃんと言い、しくしく泣く。

娘1 おっちゃん、離れんというて、離れるの嫌や。家に帰っても、何にもええことなんかあらへん、うち、離れとうない。

娘たち口々に「離れたくない」と泣く。

男 また会える。きっと再た会える。

娘2 おっちゃんは何処へ行くの？

男 わしか。わしは何処にもいかん。このままアホになって、ほんでしまいや。さ、お別れや。

娘3 おっちゃん、ちよっと待って。

男 何や。

娘3 猫の音がする。どっかに猫がおる。

男 おらへん、おらへん。

娘1 いんや、私にも聞こえた。

男 そうか。．．それはきっと自分らの声が霧にこだましたんや。

娘3 そうやろか。

男 そうや。

娘2 おっちゃん、ほんまは何処に行くの？

男 なんべんも同じこと聞くな。山を下りて、ほんで．．アホになるのんや。

娘3 うちら、いつかは報われるやろか。

男 ああ、報われる。必ず、報われるさかい心配すな。

娘たち、口々に報われたいと叫ぶ。

男 「天に向かつて」神よ、聞こえますか。聞こえまっか．．神よ、ええかげんにしとくんはなれ。．．お願いです。わしをアホにしとくんはなれ。神さん、聞こえまっかあーっ。

と、猫の声聞こえてきて。

暗転

3 座敷牢

MATTED PRISON

方丈の座敷牢、女が一人ウエディングベールを被って、鴨長明の「方丈記」を音読している。それを肩ごしに覗き見るようにレインコートの男が一人、青い顔して立っている。

女 行く河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、ひさしくとどまりたる例なし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。朝に死に夕に生まるるならひ、ただ水のあわにぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、何方よりきたりて、何方へか去る。また知らず、飯のやどり、誰がためにか心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。その主とすみか^{あるじ}と無常をあらそふさま、いはば朝顔の露にてとならず。或はつゆ落ちて花残れり。のこるといへども朝日に枯れぬ。或は花しほみてつゆなほ消えず。きえずといへども夕を待つことなし・・・。

青木さん。

男 えっ。

女 あたし、お嫁に行くんでしょ。

青木 え、ええ。

女 あたし、アリスなのにお嫁に行くのね。

青木 はあ。

アリス 不思議の国へは行かないで、お嫁に行っちゃうのよね。

青木 ええ。

アリス 青木さん。あたし、マフラーを編んだの。

青木 マフラー？

アリス そうよ、見て、この赤いマフラー。これね、これ、あたしのこの黒い髪の毛で編んだのよ。なのに、なのに、赤いの。赤くなっちゃったの。まるで血の色みたいに赤いのよ。ねえ、どうしてなの！

青木 「とり乱して」血イッ血イッ。ブーツ、アリス「マフラーを投げる」

暗転

4 眠る病^{やまい}

音もなくチンドン屋が行く。

赤いマフラーが舞いおちる。ゆっくりと。

霧が出てきた。

地下室で聖書を読んでいたあの男が、今度は白塗りの顔に皮ジャンパー、おまけに大売出しと書かれた幟まで背中におっ立ててやって来る。動物園で親にはぐれた子供のよう
にウロウロ、キョロキョロと．．．。

赤いマフラーを手にする。

と、声。あの、アリスの。

声 またネズミの夢を見たわ。

男 えっ。

声 誰？

男 俺ですか、六って言います。

声 マフラーあげるわ。

六 は、はい。あ、あの。

声 ．．私、猫が欲しい。

六 あの、おたくは？．．．。

声 ．．私、猫が欲しい。

六 あれ、ひょっとして。あの、俺ん家の近所に住んでた、あの。

声 ．．さよなら。「消えていく」

六 あ、待って下さい。あんた、あの娘なんだろう、ほら、何てった
っけなあ、猫と一緒に俺ん家の近所に住んでたその、あの．．
ああ、いけねえ。眠くなってきた。変だなまた眠くなってきた。
こんちくしょう。あー、眠。眠、ネム．．．。

霧、深くなる。

と、心地良い眠りにさそい込むような声がある。

――ある年、町の娘たちが次々と神かくしにあって居なくなつた。
しばらくして霧の深い日、山奥から猫のさかんに鳴く声が聞こ

えたので、町の人々は、あれは娘たちが猫に姿を変えられて鳴いているのだとうわさした。またある霧の深い日、ある若い男が山奥で道に迷った。すると、伸かくしにあった娘が現われて、若者に髪の毛を手渡した。若者はそれ以来、眠り病になってしまった。

霧をスクリーンにしてタイトルが映し出される。

新釈遠野物語

最後の淋しい猫」

暗 転

景 一

街路灯が点る夕暮れどき。

チンドン屋がやってくる。

国定忠治の格好をしているのが親方の猿又弁吉。ピエロの姿をしているのが、その娘のデン子。

チンチドンドチン、チンチドンドチン。これで本日の仕事はおしま〜い。てなかんじである。

デン子 おとっちゃん。世界とは何だろう。

猿又 えー？ そりやおまい、この・・・突然どうしたんだい。

デン子 あっ、おとっちゃん、とんびが飛んでる。

猿又 えっ、ああ、とんびだなありゃ、うん、うん、ピーヒョロロだ。

デン子 あのトンビが飛んでるところは世界かい。

猿又 ありやおまい、お空だよ。

デン子 お空は世界じゃねえのけ？

猿又 ねえのけったって、そりやおまい、お空はお空だよ。

デン子 そうか、お空はお空か。

猿又 さあさ、デン子。もうピエロの服なんか脱いでしまいな。今日の仕事は、オシマイだ。家へ入ってまんまにしよう。

デン子 うん、「キヨロキヨロ」あれ、六兄ちゃんがない。六の兄ちゃんが居無えど。

猿又 何だと。「キヨロキヨロ」ありや、ほんとだな。六の奴、また消えやがった。しょうがねえなあ、まったく。

デン子 兄ちゃん。六兄ちゃん。

猿又 六！ おい、六ッウツ。

しばらく、辺りに声をかけてみるが。

猿又 あの野郎、また何処かで油売ってやがるな。ちよいと眼え離すと、スグこれだ。

デン子 あっ、居たイタ。兄ちゃんアソコに居るよ。

あらぬ方向から、眠そうに六が出て来る。皮ジャンに白ぬりの顔が、一つ欠伸をする。

猿又 おい！ 六ッ。何やってんだおまい。

デン子 兄ちゃん、そんなところで何してんだよ。

六 へ？

猿又 へじゃねえよ。まったく。おい、ちゃんとチラシは配ったんだろうな。

六 へ？ 「と歩いてくる」

猿又 チラシはまいたのかって聞いてんだよ。

六 ああ。

デン子 「六のリュックを底から押しあげてみて」あっ重い、重いよ親方、何も減っちゃいねえど。

猿又 何だと。

六 るせえ！ 触るな！・

デン子 チラシみいんな、残ってるよお。

六 るせえバカー 「デン子を殴る」

デン子 「泣く」

六 泣くなバカ。「また殴る」

デン子 「泣きつつ」おやかたあゝん。

猿又 おうおう、よしよし。やい、六！ てめえは兄さんのくせして、ろくに仕事もしねえで、よくも、労働者をひっぱたきやあが

ったな。

デン子 おいら、悪いことしてねえヨーン。労働したヨーン。

猿又 おうよしよし。そうだそうだ。デン子ちゃんは働いた。今日一日働きましたあ。

六 俺だって働いたよ。

猿又 何言ってやんでえ、じゃあ、リュックの中身を見せてみる。

六 これは、その。

猿又 ほら見ろこのバカ。チラシ、まかなかったんだろ。

六 しかし。

猿又 しかもクソもねえ。

六 ち、ちゃんとまいたよ……。

又 うそつけこの、ふうん、そういやなあ、おまいがチラシまいてるところ、いっぺんも見なかった。

六 み、見えないようにやってたんだ。

猿又 へ？

六 その、そのなあっ」と、居直る「労働ってのにはなあ見える労働と、見えない労働ってのがあるんだい。

猿又 見えない労働？……何だいそりや。

デン子 親方。

猿又 ん？

デン子 それは忍術使いが姿を消して仕事をしてるんじゃないのけ。

猿又 うむ。そうか、なる程、忍術か。

六 あほ、そんなじゃねえよ。

猿又 えっ、じゃあ何だ。

六 だからその、見えざる労働つうのはだな、たとえばその見えざるっていうくらいだから、三重県の猿が、その……。

猿又 チェッ。何をブツクサ言ってるやんでえ。それより、リュックの中身を見せてみろってんだよオッ。

六 触るな。

猿又 見せろこの！

六 やめろ！ よせっ。キケンだ。キケンなんだ。

猿又 危険？ 何でだ。何でチラシ見るのがキケンなんだ。

六 これを見ると、眼がつぶれる。

猿又 え？

六 この中には、見ると眼がつぶれるものが入っている。

デン子 親方、見ると眼がつぶれるものって何だろ？

親方 そりやおまい、テンノウヘイカのおチン……。バカ。何でそんなものがリュックに入ってたんだ。

六 この中には、ま」のつくものが入っている。

デン子 ま？

親方 まっ……。ま」のつくもの？

六 それは！ それはアッー

親方 ま、まむしか。

六 そっそうだ。まむしだ。しかも普通のマムシじゃないぞ、毒のある蝮だ。

親方 蝮に毒があるのは当たり前じゃねえか。

六 アタリマエでも蝮はマムシだぞ。

親方 チェッ。何言ってるんでえ。どれ、見せてみる。

六がいやがるのを無理やり押さえつけて、親方がリュックに手を入れる。

猿又 ん？ 何だいこりゃ。『ゴソゴソさぐっている』

デン子 「配そうに」大丈夫け？

猿又 よいしょ。『手をぬく』

赤いマフラーが出てくる。

猿又 ありゃ、何だこりゃ。襟巻じゃねえか。

デン子 マフラーだ。

六、それをひったくって取りかえす。

猿又 どうしたんだそりゃ。

デン子 やーい、兄ちゃん赤いマフラーなんか持ってる。

猿又 どうしたって聞いてんだよ。えーっ。

六 これは……。。

猿又 察しはつくぞこのヤロウ。『声が震えている』このヤロウ。

やい、おまい、さっき見えざる労働やってるってぬかしやがったな。おまいの言う、見えねえ仕事ってのは、ドロボーのことだな。

万引のことだな。

六 ち、違うよ親方。こ、これは。

猿又 ああ、情ねえ。ふんともうナサケネエ。この猿又弁吉、実になさけねえよお、そりゃあ、俺たちやしがねえチンドン屋だ。デパートの宣伝はするがデパートに買物しに行ったことが無え。しかし、キャバレーの宣伝もするが、俺あ、キャバレーなんかにも行ったことは無いんだぞ。ちゃあんと、三度三度のまんまは食わせてやってるじゃねえか。週に一度はカレーライスだって食わせてやってるじゃねえか。ああ、それなのにそれなのに。いくら血はつながってねえとはいえ、電信柱の影にステられていたおまい達をひろい育てて幾セーソー。実の子のように可愛がってきてやったのに。ああホントに泣けてくらあ。

六 親方。

猿又 六、おまいなんざ、今日限り、子でもねえ親でもねえ。だまってどっかへ消えちまいな。

六 親方！

猿又 「ちよつと芝居っぽくなっている」見ろ！ 南の空に雁が鳴いて飛んでいかあ。

デン子 とんびだよ。親方。

猿又 デン子、さ、家へ入んな、今夜は洋食、食わせてやっから。

デン子 え．．．、洋食。

猿又 ああ、そうだよ。カレー、ライスを、あ、食わせて、よ、やっからなあー。

デン子 わーい、カレーライスだ。カレーライスだ。

猿又 六、てめえは消えちまえ。

デン子 ベーっだ。

二人、家に入る。残されて六、しょんぼりと。

夕闇深く。時は過ぎ、長屋にポツンと灯が点る。

六、マフラーを握りしめて、誰に言うでもなく．．．。

六 まふらあをもらった。赤くて、あたたかそうなまふらあをもらった。まふらあは冬のものであった。冬まで生きてみようと思っ

デン子がカレーライスを持って出てくる。

デン子 六兄ちゃん．．．六兄ちゃん．．．。親方に謝んなよ。ごめんなさいって、あやまんなよ。でないと家人中、いれてもらえないよ。

六 デン子が、さっきは殴ってすまなかったな。

デン子 いいんだよ、デン子の頭はカタいから。それより兄ちゃん、あのマフラー、盗んだところへ返した方がいいよ。

六 あれは盗んだんじゃねえ。

デン子 落ちてたのかえ。

六 もらったんだ。

デン子 誰に。

六 ほら、デン子も憶えてるだろ、そこん家が「と」とある家指さす」空屋になる前におっかさんと娘と猫が住んでたろ。

デン子 ああ、住んでた。

六 その娘にもらったんだ。

デン子 兄ちゃん、お頭大丈夫け。

六 兄ちゃん、今日もビラまきしている最中に眠くなってきたな、そいでボオツとしてたら、霧が出てきてな、そしたらな。

デン子 兄ちゃん、医者に行きなよ。ほら、カレーライスここに置いてくよ、親方にあやまるんだよ。

六 待ってくれよデン子。俺なあ、何も仕事が嫌いではぼってんじやないんだ。いつもいつも思うんだ。キャバレーやパチンコ屋の開店サービスのビラ配りながらな、これは俺じゃあない、こんなことしてんのは俺じゃあねえ、俺は違うんだ。違う違うって。そしたらな、いつも眠うくなってきたな。ぼおっとなるんだ。

デン子 兄ちゃん、早く親方にあやまんな、それから、お医者に行こっ、な。

家ン中から猿又がデン子を呼ぶ。

デン子 なっ、なっ、兄ちゃん。なっ．．．。

デン子、家の中に消える。

六 いいよデ月子、俺、今夜はこの空屋で寝るから、カレーライスもいらねえや．．．でも、やっぱり食おうかな。いや、食うと、家に帰りたくなっしなあ。どうしようかなあ．．．。』と再びマフラーをポケットから出して」

♪もう春だというのに

まふらあ を もらった

赤い まふらあ を もらった

電信柱に身をかくし

はじっこ少し しがんでみたら

髪の毛の味がした

まふらあは 冬のものだから

冬まで生きてみようと

しゃがみこんで 考えた

桜 忘れろ 霧 ぬけろ

春の日 はるのひ のたりの日

その場にしゃがみこむ。と、プロログに出て来たオッチャンが、鼻をヒクヒクさせて出てくる。このオッチャン、北風万石という。

北風 くんくん。ヒクヒク。カレーライスだ、これはカレーライス
のあの、カレーの臭いだ。．．あ、存在した。こんな所にカレー
ライスが存在した。食べようかな、どうしようかな。

等と言いながら、食べ出す。

北風 食べようかな、どうしようかな。モグモグ、食べようかな。
やっぱりよそうかな、ムシヤムシヤ、あれ、無い。カレーライス
が無い。いや、違う。スプーンとお皿が存在するのだ。不思議だ。
スプーンとお皿が存在するだけなのにお腹がふくれた。先程の空
腹感が嘘のようだ。ああ、これこそ神の愛だ。神に感謝しよう。
アーメン。

六が見つめているのに気づく。

六 ジロツ

北風 いやあ、君。見てたのか。わし、何かやってた？．．なに
かしていたかな。今、ここで。

六 カレーライス食ってたぜ。

北風 え！．．嘘だ。

六 ほんとだよ。

北風 ほんとかい．．そうか。食ったのか。わし、食ったのか。
無意識だった。無意識だったのだ。わし．．アホになった。

ある日突然アホになった。だから無意識にカレーライス食ってし
まった．．。しかし、食ったわしが無意識でも、カレーライス
の存在は意識的だったのではないだろうか。

六 あれ、俺が食べるはずだったんだよ。

北風 そうか、御免、さて、わしは寝る、じゃあ、おやすみ。

と、空屋に入っていく。

六 あ、オッチャン、そこ．．

北風 君の家か？

六 いんや。でも、俺も今夜はそこで寝るつもりなんだ。

北風 あっそ、じゃあ、君は二階に寝るといい。

六 平屋だよ。二階なんて無いよ。

北風 ふんなことはない。なじえなら、わし、ここの地下に住ん
でるもの。『と、入る』

六 え？『その後を追って』オッチャーン。オッチャーン。待っ
てくれよ。

デン子、カレーライスの皿をかたづけに出てくる。

『スプーンと皿を手にして』六兄ちゃん．．『キョ

ロキョロ』

ふと空を見ると、金星が美しく輝いている。

デン子 あっ、金星だ．．。

月の光なのだろうか。妖しい光の輪の中にオルガンが一つ。そのオルガンの上に布団を敷いてパジャマ姿の男が寝ている。

と、六が来た。通りすぎようとする。

パジャマ 訊ねないのかい。

六 えっ……。

パジャマ 訊ねないのかいと言ってんだよ。

六 何を？

パジャマ 我輩が誰なのか、とか、ここが何処なのか、とか

六 ろ、ああ。じ、じゃあ、えーと。

パジャマ 我輩はチェシャキャット。パジャマとも呼ばれてるけどね。

六 あ、そうか。で、その。

パジャマ ここは不思議の国。ただし、アリスのまだ来ない不思議の国だ。

六 あ、そう。

パジャマ 然るによって我輩はアリスの来るのを待っているわけだ。

六 はあ。なる程。

パジャマ 意味がないからねえ。

六 へ？

パジャマ 不思議の国がだよ……。うむ。

六 はあ、『よく分からないようす』

パジャマ そうじゃないか、えー君。アリスの来ない不思議の国なんて存在する意味がない。いや、いやいやいや。意味がないだけじゃないぞお、こりゃ君、価値の問題だ。ないのは意味だけじゃない。価値もないんだ。するとどうだ、意味も無く価値も無いものに存在する理由なんぞあるや？……。無い、そう、無いんだ。

つまり意味も価値も理由もない。それでは、それでは我輩はどうなる。いや、我輩だけではないぞお、この不思議の国はどうなる。えー、どうなるんだ。無いナイで消えちまえてことか。え

―君。

六 はあ・・・。

パジャマ じょーだんじゃない。冗談じゃないよ。そう、だから我輩は待っているんだ。

六 アリスをですか。

パジャマ 然り。

六 アリスは今、何処にいるんです？

パジャマ 誘拐われたのだ。

六 サラワレタ？

パジャマ 然り。

六 それで警察には知らせたんですか？

パジャマ チンモンカンか君は。

六 チンモンカン？

パジャマ 不思議の国では非常識にも常識的発言をする奴のことをチンモンカンといって、ケイベツする。

六 すいません。

パジャマ ああ、哀れアリスは誘拐われた。誘拐われて今、牢獄の人となっている。

六 じゃあ、助けに行けばいいのに。

パジャマ ん？

六 あ、あの俺、またチンモンカンなこと言いましたか。

パジャマ いいえ。「ジロリと六を睨む」

六 じゃあ、何か・・・。

パジャマ アリスを救出する。なる程これはしごくもつともな提案である。救出することが可能である人材が存在すれば、つまり、アリスを救出することを仕事にしている者が、この不思議の国におれば、そりゃ君、助け出すこともできるだろうが。

六 あんたは駄目なんですか。

パジャマ 我輩・・・我輩はアリスを待つのが仕事だからね。駄目さ。

六 いろいろ分担があるんですね。

パジャマ そりゃそうさ君。言、オルガンを弾きだす」

♪たとえば近所のたばこ屋の

二階に住んでる

オシヨロイ猫は

時計のゼンマイ巻くのが仕事
風呂屋の裏のアジャライ猫は

ガラスを爪で切るのが仕事

下駄屋の隣の大耳猫は

大耳猫は大耳猫は・・・

えーと、大耳猫は何だったかな・・・。

ちよ、ちよっと待ってくれよ。今調べるからな。』と、ブ厚い本を出してくる』えーと、えーと、大耳猫はと・・・。

六 あ。

パジャマ 何だね。

六 さっき訊ねようとして、つい訊ねそびれた事・・・なんですけど、今聞いてもいいですか。

パジャマ いいとも。

六 あ、俺なんですけど、俺、何でこんな所へ来ちゃったんでしよう。

パジャマ 君、名前は？

六 ろく、一二三四五六の六です。

パジャマ 123456の6？

六 いえ、漢字の六です。

パジャマ と言うと、あのチンドン屋の？

六 はい。

パジャマ 「六の顔をジーツと見て、急に泣き始める」ろ、六ちゃん・・・そうか、六ちゃんだったのか。

六 何泣いてるんです。

パジャマ 我輩、我輩が誰だか分かるかい。

六 誰って・・・。

パジャマ 我輩はね、我輩は猫である。

六 夏目漱石の？

パジャマ いやいや、文学の話をしてるんじゃない。身の上の話をしてるのだ。ねえ六ちゃん、憶えてないかい我輩を。

六 さあ？

パジャマ 猫だよ。君の家の近所にいたあの猫だよ。

六 おっかさんと娘と一緒に住んでたあの。

パジャマ そう。』と、頭にニョキッと猫の耳が出る。

六 うへーっ、懐かしいなあ、そういや俺ね、あの娘にマフラーな

んかもらっちゃった。

パジャマ ええ！！ そ、それは、ほ、ほんとうかね。

六 ああ、あの声は確かにあの娘の声だった。

パジャマ 六ちゃん、あの娘こそ、我輩が、そして不思議の国が待ちに待ち望んでいるアリスなのだ。

六 へえー、そうなの。

パジャマ こいつあ大変だ、どれ、ちよいとマフラーを見せたまえよ。

六 あいよ。「マフラーを渡す」

パジャマ くくん。これは髪の毛の油の臭いだ。すると、このマフラーはアリスが髪の毛で編んだのか。六ちゃん。

六 へ？

パジャマ 行ってくれアリスの所へ。

六 俺がかい。

パジャマ そうだ。

六 でも俺はただのチンドン屋の・・・。

パジャマ 嘘だ。嘘だウソだ六ちゃん。六ちゃん君はいつもチンドン屋の仕事をしながら、これは自分では無い、自分のする仕事じゃ無いって、そう思ったじゃないか。

六 何で知ってたんだ。そんな事。

パジャマ 猫は何でも知っている。六ちゃん。君だ、君の仕事だ。アリスを救出するのは君だ。

六 ふんなこと急に言われても、いったい俺は何処へ行きゃいいんだい。

パジャマ マフラーの案内するままに。ささ、早く早く、いそいで急いで。「六の背を押す」

六 わ、分かったよ。分かったから、押すなよ。ちくしょう、何が何だかさっぱり分かんねえや。どうせ夢に決まってるんだ。俺、たいてい今眠ってたんだ。きっとそうだ。

パジャマ さあ、ぶつくさ言ってるで、早く早く。

六 じゃあ、まあ、何とか行ってくら。えーと、マフラーさんマフラーさんどっちへ行けばいいのかな？ こっちなかな？

六、去る、チュシャキャットのパジャマ、先程のブ厚い本を繰る。

パジャマ 六、六、六．．．六．．．と、あったあったこれだ。どれどれ、えーと仕事は．．．何々．．．ふむ。変だな．．．アリスを助け出すのが仕事じゃないぞ。彼の仕事は違うぞ。こりゃふむ。するとアリスを助け出す役目は誰なんだろう。「本を繰る」アリスがいつまでたってもここへ来ないところを見ると、きっとそいつさぼってやがんだ。何でこんな単純なことに気付かなかったんだろう。いったい誰なんだろう、さぼってる奴は．．．「本を繰る」．．．あっ、めつけた。あったあった。何々、北風．．．北風猫。そうか、ノースウィンドーキャットか．．．

本を閉じる。表紙には職業別猫事典と記されてある。

暗転

景三

鴨長明の「方丈記」を読みあげる女の声が聞こえる。ゆらりと明るくなる。

プロロオグの座敷牢。 「方丈記」を読みあげつつアリスが手習いをしている。

その後に、レインコートを着て青木がいる。くるりとふりむくと、唇にひとすじの血。

アリス ゆ．．．く．．．かわあ．．．の。ゆくかわの。

青木 はいはい、その「」は反対ですね。あなたのは「」の鏡文字」」になってる。

アリス このの？

青木 そう、そのの。

アリス 私なのって反対なの？

青木 そののはのじゃないですよ。

アリス こののね、でもこののののののとは違うでしょ。

青木 ええ、そののが正しいのののの。

アリス え？

青木 いえ、もういいです。

アリス もういいの？

青木 のは、もういいです、次、書いて下さい。

アリス た．．え．．ず．．し．．て、たえずして、

青木 はいはい、流れは、がぬけましたね。

アリス ながれハ？

青木 ハ「じゃないでしょ、 は」でしょ。ああ血が欲しいな。

どれ、もう三時じゃないか。先生遅いな、ああ血が欲しい。

アリス ああ．．ちが．．ほし．．い。

青木 これこれ、そんなこと書かなくてよろしい。ああ、血が欲しい。

アリス 血が欲しいの、青木。

青木 ええ、そろそろね。

アリス 大変ね、吸血鬼って。

青木 ええ．．遅いなあー――。

アリス 誰か来るの。

青木 アリスさんのお父上ですよ。血を持ってきてくれるはずなんです。

アリス 三時のおやつに？

青木 ええ、三時のおや血、それがこないと、俺、血が欲しくなりすぎて、狂っちゃうんです。

アリス 大変ねえ、吸血鬼って。

青木 あああ、血が、血が欲しひひ。

と、響く足音

アリス あ、聞こえる、誰か来るようよ。

青木 田所センセやろか。血、血イ持ってけテクレタンヤロか。ひひひい。

アリス アリスを呼ぶ男の声がする。

アリス あ、あの声はパパだ。

青木 先生や、田所センセイや、ああよか血だ。うれ血イうれ血イ、ボクもう泣こ。ウェーンウェーン。

アリス 大変ね。吸血鬼って。

ガウンにステテコ姿の田所天助やって来る。

田所 アリス。アリス。パはパはだよ。パはだよ。

右手に鞭、左手に血の入ったフラスコを持っている。

田所 アリス、どうか。お勉強はススンでいるかね。どうかね
青木君、アリスのお頭の具合は。

田所 何だ何だどうしたんだ青木君、元気そうな青い顔して、何を泣くんじゃ。

アリス 血が来たから感涙してんのよ。

田所 おおそうか。よしよし、もう泣くな。それぞれ、うんと飲め。

青木 「フラスコの血を飲む」ぐびぐび。

田所 美味かね。

青木 美味です。あーうま、あーうま、あーうま。

田所 馬がどうかしたかね。

青木 ロバロバロバ。

田所 ケツタイなやっちなお前は、青木君。

青木 ああ、おいしい血だった。

田所 そりやそうだよ、ついさっきまで、その血は立ったまま眠っておったんだから。ほほほほ。昔、東北の歌人が、血は立ったまま眠っていると言っておったが、あれは正しい。しかし、だからと言って電信柱がそうだというのはチトおかしい。もし、電信柱が立ったまま眠っている血としたら、貧血を起こして倒れてしまう事もあるはずだから。そうナリや世界は停電だらけになっちまう。ひひひひひ。がしかし、血が眠っているというのは本当だ。眠ったまま、血は核酸のくさりのように人々をつないでいる。

アリス では、誰もかれもが眠っていて、まるで冬眠しているかのように眠っていて、そして、もし、その中でふと目覚めてしまった血があったとしたら、そう、起きているのが自分だけとしたら、その血は、その血は自分の事を血だと思っかしら。

田所 「アリスを睨んで」青木君、アリスのお頭は全然良くなっていないじゃないか。

青木。は、はい。

田所 アリス。
アリス え。

田所 お前は婚姻するのだよ。
アリス ええ。

田所 余計な事は考えずに、ここでよくお頭を治すのだ。いいね。
アリス はい。

田所 ところで青木君、君のお見合いの件だがね。
青木 お見合い、ぼ、僕がお見合いするんですか。

田所 そうじゃよ。
青木 初耳だなそんなこと。

田所 そりゃそうだ、わしだって初めて口にしたんじゃない。
青木 そうか僕、お見合いするののか。

田所 そうだ。知らなかったのか。
青木 ええ、チートも。

田所 そりゃそうだ。わしだって今まで知らなかったからな。
青木 初耳ですよ。

田所 そうじゃよ。ところで、君のお見合いの件だがね。
青木 えー、お見合いするんですか、僕が。

田所 いいかげんにしろ。セリフをクラインの壺に入れるな。メビ
ウスの輪っかから出せ。

青木 はい、えーと、それで相手は誰なんです。
田所 デン子とかいう、チンドン屋の娘だ。

と、あらぬ方向から、六の声。

六 えーっ、デン子だって!!

田所 誰だ。

田所 たち、周囲を見廻すが・・・

田所 今、確かに声がしたぞ。わしたちの他にここに誰かいるの
か。

青木 いいえ。
アリス さあ。

田所 誰だ、誰か居るのなら出て来い。出て来い！ 出て来やがれ。

青木 そんなふうに威しちやあ、出てこれませんよ。

田所 そうか。じゃあ、えーと、おい、五円やるから出て来い、五円やるぞ。

と、マフラーくるくる回しながら、六が出て来る。

六 別に、五円ほしいってわけじゃないけど・・・。

田所 誰だ。どうやってここへ来た。

六 こうやってマフラーくるくる回しながら歩いてたらここへ出ちゃったんです。

青木 先生、あの男が持つてるマフラーね、あれアリスさんのです。田所 何、アリスのマフラーだって何でそれをあの変なのが持つてるんだ。まさか、プラトニックを越えてラブしてんじゃないだろな。心配だな。あっ、心配してるうちに居なくなつた。心配しただけバカみたい、青木君、捜せ、捜して連れて来い。

青木 は、はい。「行く」

田所 何だか頼りないな。まて待て青木君わしも行こう。「行く」

と、残されたアリスの前にマフラーがふわりと舞う。

アリス あら？ マフラー。「手にとる」

と、六の声がする。

六 そのマフラー、あんたんですね。

ひょいと、出る。

六 デン子のヤツ、ほんとにあの変なのとお見合いなんかすんのかなあ・・・。こんちは、あんたにマフラーをもらった六です。

「アリスをじっと見つめて」ねえ、あんた。あんた俺ん家の近所に住んでたあの女の子だろ。ほらおっかさんと猫と一緒に住んでたあの。

アリス えっ？

六 憶えてないかな。俺、チンドン屋の六なんだけど。

アリス さあ？

六 ぼら、いったったか、二人で焼きイモ食ったでしょ。

アリス 焼きイモ？

六 八百屋で、こんな小さなサツマイモ盗んできて、そいでもって、やいサツマイモ、てめえはよくもイモになりやがったな。イモイモしいヤツだちょっと来い、ヤキを入れてやる。そう言って焼きイモにして食ったじゃないか。

アリス 私、オイモをそういう具合に変チクリンに食べたことなんかないわ。

六 そうか．．．忘れちゃったのか。でも突然居なくなったと思ったら、こんな牢屋に入れられて、いったい何してんです。

アリス お勉強よ。

六 勉強？

アリス そうよ。私、婚姻するの。だから、お頭の具合を良くして
るのよ。

六 「方丈記を手にして」難かしい本読んでんだね。

アリス 方丈記よ。

六 へえー、アメリカの国旗みたいだな。ま、いいや。さあ早いとこ逃げましょう。「手を引く」

アリス 「その手をふりほどもい」何処へ連れてく気。

六 何処って、不思議の国ですよ。

アリス 誘拐する気ね。

六 何言ってるんだ。誘拐されてここに居るんだろ。

アリス パパーッ、誰か来て――。

六 ちよっと、オイ、どうなってんだいこりや、話がちがうぜ。

青木と田所、もどって来る。

青木 先生――！ あそこあそこ。

田所 やや、あんなところに。

六 アリス、君はアリスなんだろ。

アリス そうよ。

六 どうしたんだいアリス。不思議の国じゃ君のこと待ってるのに。
アリス でも私、婚姻があるから．．．。

田所 青木君、つまみ出せ。

青木　へい、「六につっかかる」

六　「青木を突きとばして」アリス、知らないよもう。俺だって、何だか理由も分かんないうちに、たのまれただけなんだからな。

田所　青木君、しっかりしろ。「青木を抱き起こす」

六　アリス、マフラーもらって行くからな。

アリス　あの。

六　えっ？

アリス　また来てね。

六　何だいそりゃ。ムジ ユンしてるなあ。

首をひねりつつ、六、去る。

田所　「青本の首をしめながら」どうだ青木君、苦しいか。えー、く、苦しいか。

青木　苦しいです。

田所　ええい、苦しめ苦しめ。

アリス　何してんのパパ。

田所　青木君の首をしめてるんだよ。

アリス　どうして？

田所　サナモケて、ヘタレたからな。これでいいんだ。

青木　く、苦しい、苦しい。

アリス　確かに変だわ、こいつら。「と、タメ息」

田所　こらくそ、こらくそ、こらくそ。

青木、苦しんでいる。田所はコーンしている。

アリス、ほおづえついてポカンとする。

暗　転

おーい、おーいという北風万石の声がする。

眠っている六、その耳もとで。

北風　おーい、おーい。

六　「はね起きて」うわっ。．．何だ、オッチャンか。

北風　毛布を持ってきた。これを着て寝るといい。

六　どうも．．．。「六、毛布を受け取り」やっぱり夢だったのか。

北風 え？

六 いえ、一人言。

北風 あ、そう。

六 「ポケットからマフラーを出す」・・・アリス・・・

北風 「マフラーをジッと見つめて」・・・君。

六 え？

北風 それ、マフラだね。

六 ええ。

北風 うん。マフラだマフラだ。どれ、ちょっと。「マフラを取り

あげ」くんくん、くんくん。そうか、この臭いだったのか。さ

つきからわしの嗅覚に、脳という脳の記憶の一切がっさいを動員して訴えかけていたあの髪の毛の臭い。それがこれか。シガシガ

「と、マフラーを吸嚙んでみる」おおこれは、アリスの髪だ。

六 アリスが何だって。

北風 いやいや、先程からこのわしの鼻もとを妙にくすぐる香りがしていたのだ。プンプンとね。わしに何かを思い出せ思い出せと、そいつはミゾにキズがついたレコードの反転のようにわしに訴えかけていたのだよ。

六 このマフラーの持主を知ってんのかい。

北風 アリスだ。

六 すると夢じゃなかったんだ。じゃあ、田所天助ってヤツも。

北風 知っている。いづな使いの男だ。

六 いづな使い？

北風 その昔、伊藤忠繩が長野県飯綱山にて行を修め、神通力を得たという。以来、キツネを用いてする幻術を飯綱という。

六 しかし、キツネはいなかったな。

北風 田所はキツネは使わない。もっと別の怖ろしいものを使う。

まるで飯綱使いのキツネのように。

六 いったい、何を使うんだい。

北風 それは。

六 それは？

北風 それはそうと、あのカレーライス美味かったな。味の秘訣はニンニクかなあ。

六 はぐらかさないで教えてくれよ。田所は何を使うんだ。

北風 ニンニクを使う。カレーにはニンニクだなやっぱり。

六 殴るぞこの。

北風 ああ、待て待て。言う。言うから待て……。田所のな。・ヤツが使うものはな。それは、ヘラヘラヘラ。

六 ヘラヘラ？ 何だよヘラヘラつて。

北風 あの……。わし、君に何か言ってた？ 何かしゃべった？
六 ああ。田所天助のこと。

北風 ところてん？ 何じゃいそりや。

六 オッチャんどうしたんだよ。急に。

北風 わし、わしなあ、突然頭の中が裏返しになるのよ。御免してくれ。な。ああ……。何を思い出したのかさえ。忘れてしまった。もう屁えこいて寝よつと。

六 えー！ 何言ってるんだよ。しゃあねえなあ。……。マフラー返してくれよ。

北風 うんうん。わし、何でこんなもん持ってんのかな。屁えこいて寝よつと。

六 「マフラーを手にして」アリス、また助けに行くよ。俺。何となく、俺が俺であるような、そんな気持ちになりかけてんだ。ああ悪い夢でも醒めないでくれ。誰もかれもが眠っていて、俺だけが起きている。俺はきつとそんな夢を見ているに違いない。

マフラーを握りしめる六。

暗 紘

景 四

i E I f i I 争 r 甲 っ

お茶づけをかきこんでいる猿又とデン子。モーニングがー着ぶらさがっている。

家の外には六がつっ立っている。

猿又 おい、六。そこにつっ立ってんのは分かってんだ。早く入って来てメシ食え。

デン子 そうだよ兄ちゃん。お茶づけおいしいよお。

猿又 ゆんべは何処へ行ったんだ。何処で寝たんだ。あのマフラー、

ちゃんと返しに行ったらうな。

六 あのマフラーは、もらったんだよ。

猿又 いいから入んな。

六、しぶしぶ中に入る。

六 「モーニングを見て」何だいこれ。

猿又 何だいこれって、おまい、見りや分かるだろ。

六 どうすんだいこれ。今日、仕事は休みなんだろ。

猿又 仕事は休みでも用事はあんだよ。今日はな、デン子がお見合
いするんだ。

六 お見合い！

猿又 おとっちゃん、デン子と出かけるから、おまいはルスバンし
てろ。

六 親方。だけど。

猿又 だけど何だい。

六 デン子はまだ十五になったばかりだぜ。

猿又 十五で姉やは嫁に行きってな。昔からそういうふうに言うん
だ。女は十五で嫁に行くのが一番なんだよ。

六 でも親方。

猿又 おとっちゃんと言え。仕事の無え日はおとっちゃんだ。

六 おとっちゃん、デン子の相手は吸血鬼だぜ。

猿又 六、おまい、お脳の具合、悪いんじゃないのか。

六 デン子はいいいのか。

デン子 うん。おいらお見合いして結婚すんだ。

六 結婚は人生のハカバだぞ。

デン子 何、それ。

猿又 余計なこというんじゃないよ。さ、デン子、早いところ着替え
な。

デン子 うん。

デン子、ドレスに着替える。

六 なんだよその格好は。舞踏会にでも行くみたいじゃないか。

デン子 かぼちやの馬車に乗っていくんだよ。

六 かぼちゃが、かぼちゃの馬車に乗って、どうすんだい。「真面目な顔で」

デン子 「泣く」

猿又 バカヤロ、おまいは兄^{あに}さんの癖して、どうしてデン子をイジメルんだ。

デン子 おいら、カボチャじゃないよおくん。

猿又 そうだそうだ。カボチャじゃない。きれいだよデン子。デン子ちゃんはシンデレラみてえだよ。

六 何だいシンデレラって。

猿又 うるせえ、おまいはちゃんと留守番してろ。さ、デン子や、行くよ。

デン子 うん。

二人出て行く。六、心配そうにそれを見送る。

と、北風が又ウツと出てくる。

北風、美味そうなツケモノだな。

六 ワツ、びっくりした。何だ、オツちゃんか。

北風 「勝手に御飯をついで、お茶づけを食べ始める」

六 オツちゃん。

北風 ん？

六 ちょっと留守番しててくれよ。

北風 出かけんのか。

六 ああ、デン子が、その、俺の妹が大変なんだ。

北風 お見合いかい。

六 何で知ってたんだ。

北風 この町ではな、女は十五になると皆んな見合して結婚させられるんだ。

六 そんなこと俺、初耳だよ。

北風 うん。おまえさんはこの町の人間じゃないからな。ポリポリ。

六 俺、ステゴだったんだ。

北風 うん。美味しいなこのツケモノ。

六 デン子は何処へ行ったんだろ。

北風 お役所だよ。モグモグ。

六 お役所？

北風 うん。パクパク。お式があるんだよ。

六 何の役所。

北風 おのつく役所だよ。ムシヤムシヤ。

六 ．．．何処の役所だよ、そこは？

北風 今、地図をかいてやっから。

六 オツちゃん、なんでそんなこと知ってんだ。

北風 へん、わしゃあ、おタズネ者だからな。ガサガサ。

六 何か悪いことしたのかアンタ。

北風 うん。この町からな、へへ、女をな、連れ出したんだ。へへ。

六 あ、あんたは。

北風 分かったかい。北風万石だよ。

六 女を連れて、何処へ行くつもりだったんだ。

北風 へへ、そりやお前、不思議の国さ。わしはな、不思議の国へ女を連れて行くのが仕事でな。へへへ、それがその、どの女を連れて行くのか、へへへ．．．忘れちまって．．．エヘエヘエ．．．ヘラヘラヘラ。

六 あ、また頭ん中が裏がえしになるんじゃないのか。

北風 エヘエへ。

六 しっかりしてくれ、オツちゃん、地図かいてくれ。早く。

北風 「へらへら笑いながら地図をかく」

六、その地図をもぎ取って外へ。北風、笑いつつ去る。

六、空屋の前に現われる。

六 何てことだ。もどって来ちまった。この地図の通りに行くと。この空屋だ。「自分の家をのぞく」オツちゃん、北風のオツちゃん！．．．チェツ、居無えや。どうしようかなあ。どうし．．．どう．．．あれ、いけねえ、また、眠くなってきた。いけねえ、また、眠．．．「眠ってしまう」

暗 転

季節は昔。あの空屋が空屋でなかった頃。

家の中ではポツンと少女が本を読んでいる。もちろん、少女はアリスであり、本はプロログで男が読んでいたもの

と同じものの同じ部分である。

外は雨。冷たい雨。シトシトと。

アリス 雨は四十日四十夜、間断なく降り続き・・・「続けて読む」

アリスの母親らしき女、蛇の目傘でもどって来る。

母 「傘をたたんで」おお、いやな雨なこと。まったくよく降るねえ。もう十日もこれだ。只今。今、帰ったよ。大人しくしていたかい。

アリス おっ母さんかい、おかえり。

母 すぐまんまにしようね。

アリス おっ母さん、私また夢を見ちゃった。

母 またかい。またあの夢かい。

アリス うん。

母 それで、熱は？

アリス 汗が出た。いっぱい。

母 そうかい。困ったね。どうして同じ夢ばかり何日も何日も見るんだらうね。

アリス 外はすごい雨が降っているの、もう空も海も山も陸地も何もかもが全部雨の中に消えてしまっているの。それで、その海の上だか空中だか分らないところを私、ゆれてるの。まるで大きな方舟のように。ぐらありぐらあり、ぎいしぎいし。・・・私の身体の中にはありとあらゆる生きものが蠢いていて、私と一緒にゆれてるの。ぐらありぐらあり。ぎいしぎいし、そいったちは大人しいから、私には何も恐くはない。でも、突然、血のしずくがポタポタと、私の身体中に落ち始めて、全身が血まみれになるんじゃないかと思っていると、その血の斑点があっという間にネズミになるの。このネズミだけは、こいつらだけは、それは恐しい生きもののなのよ。私の脳を、眼を、唇を、私の胸を、胃袋を、子宮を、内側から、あの細かく鋭くとがった歯で喰い破って、引きちぎり、私の身体は皮一枚を残して、血の袋のようになって、その重さのために沈んでいくのよ。すると一番大きなネズミが、私の処女のしるしを長い爪のような歯にかけて噛み切るの。私は海

だか空だか陸だか分からない雨の中に溶けてしまつて、私の黒い髪のみだけが、苦しうにからまつてそこに残るわ。でもその髪の毛さえも、血は赤く染めるのよ。

母 やっぱりお医者を呼んだ方がいいのかねえ。

アリス ううん。『首を横にふる』お医者なんか駄目よ。

母 アスピリンも効かないし。』と、空になつた薬のビンを見る』

アリス おっ母さん。

母 え？

アリス 私、猫が欲しい。

母 猫って、あの、ニャンコのことかい。

アリス うん。猫さえいればきっと、私の身体の中のネズミを退治してくれるわ。

母 そりゃあそうだがお前の夢の中へ、どうやって猫を入れるんだい。

アリス 猫もまた私と同じように夢を見ればいいんだ。

母 そんな猫が、さて、いるだろうか。

アリス おっ母さん。私、猫が欲しい。

母 分かつた分かつた。じゃあ、チンドン屋の猿又さんにでもたのんで、猫をさがしてもらおうね。

アリス うん。さっきも六ちゃんに私、焼きイモもらつちやつた。

母 おや、そうかい。そりゃよかった。．．．『一人言』お医者に見せなきゃ駄目だね。

アリス え、何か言った？

母 いいえ何、お前ももうすぐ十五になるから、お嫁に行かなきゃって、そう言ったんだよ。

アリス ふん。

暗 転

景 五

お役所。職員たちが働いている。

青木がふらりとやって来る。

青木 フラリ、フラリ、「ほんとにふらついている」ああ、貧血気味だなあ。．．早く血イ吸わなくっちゃ。あのお。

職員 はい。何か御用で。

青木 課長さんを。

職員 はい、課長ですね。あの、どちら様で。

青木 僕、青木です。

職員 はい青木さんですね。少々お待ちを。課長！ 課長！ 青木様がお見えです。

くちなしの花」なんかを歌いつつ課長が出てくる。

課長 おやおや青木さんじゃありませんか。うわさは聞いてますよ。今日はまたおやつれですね。

青木 ええ、やつれちゃってます。

課長 今では指輪も回る程でしょう。

青木 いえ、回るのは眼の方で。

課長 それはいけませんな。

青木 血イ、くれませんか。

課長 血ですか。

青木 ええ。

課長 「職員に」君々、うちに血なんかあったかな。

職員 あるんじゃないですか。無けりや無いでいいんじゃないですか。

課長 君、いい性格してるなあ。あの青木さん、とりあえずこの書類にハンコを押して下さい。

青木 はい、ハンコ押せば血イくれまんなのか。

課長 お役所の仕事というのは、ハンコを押せば何でも何とかありませんからね。

青木 押しませ。なんぼでも押しませ。

課長 「職員に」おい君、いい性格の君。青木さんに血をやってくれ。

職員 はいどうぞ。「小さなピンを出す」

青木 うわっ、血や、血イ飲もつと。ゴクゴク。

課長 君、この血は誰の血。

職員 虹子さんのです。

課長 うわあ、ロマンチックな名前。虹って、あのお空にかかる虹でしょ。

職員 はい。

課長 で、何処の虹子さんなの。

職員 清川の。

課長 うわっ、可愛い。

青木 どうも、ゴチソーサマ。さあこれで元気が出たぞ。あの、課長さん、実は僕、お見合いすることになったんですが。

課長 え、それはおめでたい。それじゃあ田所所長の言ってた今日お見合いなさる方ってのは、青木さん、あなたでしたか。

青木 ええ、そーなんです。先方はお見えですか。

課長 いえ、まだです。それじゃあ青木さん、この書類にハンコ押して、奥で待って下さい。

青木 はいはい。ペタン。

課長 ではこちらもペタン。

青木のおデコにハンコを押す。

と、あたふたと、猿又とデン子が入って来る。

猿又 うへえ、アタフタあたふた。それ大急ぎイ。

デン子 あたふた。

猿又 うへえ、うへえ。ま、間に合ったかな。あのもし、スイマセン。

課長 おや、これは猿又さん。

猿又 へい、猿又です。

課長 私、課長です。

猿又 これは課長さま。

課長 今日はまた、何用得、

猿又 へい。実はうちのデン子が。

課長 ああ、そりゃおメデタイ。

猿又 間に合いましたか。

課長 はいはい。

猿又 そりゃあよかった。

課長 先方の青木さんも今お見えで。『と、青木を紹介する』

猿又 え、この方が、こりゃどうも、猿又でございます。これ、デ

ン子。

デン子 もじもじ。

青木 俺ア、青木だア。何か文句あつか。

猿又 いいえ……。何か元気のいい方だな。

デン子 もじもじ。

猿又 これデン子、おまいそんなに下関してないで、御挨拶しねえか。

課長 猿又さん、これは下関じゃありませんよ。

猿又 じゃあ、何で？

課長 門司ですよじ。

猿又 ああ、もじか、もじもじか。

デン子 もじもじ。

青木 俺ア青木だア、何か文句あつか。

猿又 いいえござんせん。「課長に」なかなか元気のいい若い方ですな。

課長 ええ、何しろ今、虹子ちゃんの血イ飲んだもんで。おい「職員に」あの血、何か変なもん混じってなかったか？

職員 「ビンを見る」あ、たいへんだ。

課長 どうした。

職員 ビタミン・Mが入ってました。

課長 Mっていうと、まむしか。

職員 はい、まむしの血です。

課長 うへ、こいつあ、大変だ。

青木 お、俺ア青木だぞオッ。

猿又 はいはい。

課長 早く所長来ないかな。ウロウロ。

と、田所来る。

田所 来たぞ。

課長 あ、来た。

職員 課長、田所所長がお見えです。

課長 分かっているよそんなこた。所長、本日のお見合いの方がお見えになっております。

田所 来たぞ。

課長 ええ、分かっております。

職員 課長、田所所長がお見えです。

課長 分かってるよ。

田所 来たぞ。

青木 青木や、文句あるのんけ。えーっ！

田所 来たぞ。

職員 課長、田所所長が。

課長 ああん、もう。所長、メビウスごっこはやめて下さい。

田所 そうかそうか。よしよし、それではさっそく真面目になろう。
全体く真面目！

みんな真面目な顔になる。お役所の空間が突然、あの座敷
牢とつながる。つまりあの座敷牢がコッゼンと、お役所の
上部に姿を現わす。アリスと、娘たちが、哀しそうな顔で、
お役所を見ている。

田所 それではお見合いの式を始めましょう。このお見合いの儀を
無事終えましたらば、来たる良ろしき日に、婚姻の儀をば、とり
おこないます。それではまず、青木君。

青木 はい。

田所 えー、青木君はえー、青木君と申しまして、なかなかの好青
年であります。

青木 好青年だよーん。

田所 こら君、それが好青年のすることか。

青木 することじゃないよーん。

ヨ幵 ま、このようにユーモアのある男であります。はい。

猿又 は、えー、あの、その、えー、まーその、うちの、えー、デ
デン子はその、まだ十五になったばかりのその、花に例えれば、
まだその蕾でして、な、おい、

デン子 つぼみだよ。もじもじ。

猿又 つぼみかもじもじであります。

田所 あっ、そう。つぼみね。つぼみ大好きですよ。それでは課長。

課長 はい。

田所 お血取りを致しましょう。

課長 はいはい、おい君。

職員は。

職員、注射器と、フラスコを持って来る。

田所、それを手にして、

田所 これから私が相方のお血を取って、ここに入れます。これは婚姻のお式の際に皆で混ぜまぜして、頂きますものです。

猿又 へへい。．．．おいデン子、血を取るんだとよ。

デン子 痛くないかい。

猿又 なあに、スグに済むさ。

と、六が飛びこんでくる。

六 デン子！

田所から注射器を取りあげ、床にたたきつける。

田所 ナッ何だお前は、

デン子 兄ちゃん！

猿又 六！

田所 やや、この間の、おい、取り押さえろ。

六 デン子、帰ろう！ 「手を引く」

猿又 バ、バカヤロウ。おまいはこの大切なお式の最中に、何をしやがるんだ。

田所 ええい、早く取り押さえろ。

課長 はい、その前にこの書類にハンコを。

田所 よし、ペタン。

課長 おい、取り押さえるぞ。

職員たち、六をつかまえる。

六 デン子！ 親方！ 眼を覚ますんだ。こいつらは、吸血鬼だ。

イツナ使いだ。

猿又 六、眼え覚ますのはてめえの方だ。

田所 「課長に」連れてけ。

と、北風万石が現われる。

北風 待て！ マテまで待てえ。

六 オッチちゃん。

田所 何だ今度は、誰だお前は。

北風 久しぶりだな。

田所 やや、おまえは北風万石。

課長 所長、御存知で。

田所 忘れるものか、課長、おまえも憶えておろう。この町から娘たちを連れ出そうとしたあの万石だ。

課長 げッ、あの万石キリスト。

田所 万石、おまえは指名手配中じゃなかったのかね。

北風 如何にも。

田所 おい、ケーサツだ。ケーさつを呼べ。

課長 はい、ではここにハンコを。

田所 よし』と、ハンコを押そうとするが「何々、『文面を読む』何だ君、こりゃ賃金値上げの確約書じゃないか。

課長 うへ、バレたか。

田所 この野郎、ドサクサに。ええい、早く呼べ。

と、いつの間にか居無くなってた青木が、

青木 田所センセ、僕が今呼びました。

田所 お前そうか、えらいぞ青木君、五円やろう。『五円やる』

と、パトカーらしいサイレン。

六 「職員たちを振り切って」オッチちゃん。

北風 心配するな、ここはわしにまかせて君はデン子ちゃんと早く逃げろ。

六 デン子「手を引く」

デン子 おとっちゃん・・・

猿又 分からねえ、俺にはチットモ分からねえ。しかし、こうするしかねえ。

と、北風の頭をはいていたクツで殴る。ボカ、北風、のびる。

六 あ、オッちゃん、

田所 でかした！ 五円やろう。

職員たち、再び六を押さえつける。

猿又 六、眼をさませ。眼をさますんだ。

田所 そうじゃ。眼をさませば、五円やるぞ。

六 いるもんか。おとっちゃん、デン子よく聞け、よく聞けよ。俺アなあ、眠ってなんかいない。眠ってんのはそっちなんだ。俺は起きてる。起きてるんだ。そうなんだ。俺はたった一人でこうやって起きている。そういう夢を見ているんだよオッ。

デン子 兄ちゃん。

サイレンの音近づく。

暗転

景 六

名曲 「スターダスト」が流れている。あの座敷牢に六がパジャマ姿でポツンと坐っているのが見える。

別の所に、白衣の医師が後向きで坐りながら、患者の話を聞いている。

患者はあの娘たちである。

娘1 わたくしがこれから語るひとつの昔の物語は、羊皮紙に化学インクで記された歴史の記録のようなものではなく、わたくしという現象が、まるで夕暮れ時のネオンサインのように、しっかりとしないで不確かに点滅しているという、ただそれだけの、聞きすこせばたあいのない浜辺の波のような話なのだと、そうお考え下さい……。もう、四半世紀も生きたとゆうに、わたくしの

心の時計はわたくし自身に時を知らせず、いつの場合も、何かしらわたくしが事をなそうとすると何処からか、古い巨大な時計が現われて、聞きたくもないゼンマイの音や歯車の音とともに凶々しい時を告げていくのでございます。今度現われたら必ず壊してやろう。その古い巨大な時計の事を思う度に、銀の楔を持った若い水夫が現われて、わたくしに百年に一度、出るか出ないかと言われている、反世界のネジ回しを渡してくれるのではないだろうか、そのネジ回しでもって、巨大な時計の心臓を一突きすれば、古のヨットの帆が引き裂かれるように私の悪夢も終わり、わたくし自身の心の時計が、すっかりと熟睡している私の脳に、朝の目覚めを知らせてくれるのではないかと、そう思っております。そんなある日、もとは船乗りであったという風のような男が現われたのでございます。その男が言いますには、女には少女になる権利というものがある。少女というのは未だ血で汚れていない無垢な細胞のようなものだ。精神の有機化合物のようなものだ。もしお前が少女になりたいのなら、わしとともに来るがよい。少女にしか行けぬ国へ行こう。と、

娘2 私は月夜が好きな素粒子だったと思います。何故月夜が好きかと申しますと、太陽の下ではすぐに消えてしまいそうな、きゃしゃな雨粒のような心が私の肉体の全てに詰まっていて、それが月夜だと、化石になった涙のように透き通るからでございます。ですから、私は月夜のような男と結ばれたい。青白い空気を指でかきまわしている手品師のような人と結婚したい。と、考えておりました。でも親が決めた私の夫というのは、私の一番苦手な太陽のよう、いいえ、まるで熔けつつある熱い鉛のような男だったのです。私は毎日毎日、自分が干上がって消えてしまいやしないかと、不安で不安で悲しくて、鏡に頬ずりしながら泣いておりました。

そんな時、あの男が現われたのでございます。男はとある少女のことを思い出さねばならないと申しております。

娘3 詩を読むことにします。何故なら私は散文のように生きてこなかったから……。

スターダスト「星屑」

星もさみしくて眠れまい

それでこの夜は

金魚鉢をとおしてのぞいた夜汽車のように
くるくるとゆがんで美しいのだ

降るようにしてやって来る

私の小さな銀河系が

指先にからみつき

温度のない花火のように燃えて消える

私のからだに

飛び敖っていく星屑たちよ

おまえたちのために 私は

ミステリーを語ってあげよう

どこの家にもある

生きている押入れか

あるいは夏の地下室に

狂人がひとりいて

旧約聖書を読んでいる

この地下室のとなりは不思議の国で

そして上は座敷牢だ

そこに囚われのアリスがいる

狂人には仕事がある

アリスの生体内に発生したネズミどもを

冬の日のテロルのように

一匹残らず殺さねばならない

狂人はずっと眠っていたから

この仕事のことを知らなかった

しかし目覚めた狂人はもう猫のように知っている

自分が何の為に生まれてきたのかを

狂人は一本の骨のように銃を握る

これがミステリーのあらすじだ

さて星たちよ、星屑たちよ
もし彼が仕事をやり終えて
もう眠ることも起きることも忘れてしまったら
どうか遠い夜汽車に乗せて
この夜のどこか

静かな天体で

そっとおまえたちの仲間にいれてやってくれ

スターダスト スターダスト

では

ミステリーの続きを始めよう。

娘たち姿を消す。と、猿又とデン子がいる。

医師、くるりとこちらを向いて。この医師はあのお役所の
課長であってもいい。

医師 時々ふいに居眠りをし始めるようになったのはいつ頃からで
すか。

猿又 さあ、ここ半年．．．いや三ヶ月程前かな、最初は、仕事さ
ぼりたい口実だとばかり思ってたんですがね。なあおまい。

デン子 うん。

医師 その頃、他に何か変わったことはありませんでしたか。

猿又 変わったことねえ．．．

デン子 おとっちゃん、ほら、あれあれ。

猿又 あれって？

デン子 ほら、あれだよ。

猿又 ああ、あれか。

医師 何か、ありましたか。

猿又 あれなんですがね。

医師 あれって？

猿又 「デン子に」何だったっけ。

デン子 万石キリストだよ。

猿又 あ、そうそう、あれだ。

医師 万石キリストというと、例の若い女性を連れて失踪した、あ

の、

猿又　へえ、それなんですがね。その事件のニュースをテレビでやってたんですがね。まあ、うちはまだ白黒テレビでして、はい。

内容はチョイと違うかも知れませんが、

医師　白黒もカラーもニュースの中身は同じですよ、そのニュースがどうしました。

猿又　へい、ニュースでは万石の事を、女衞の親分みたいに言ってたんですが、そいつを見ていた六が、突然、間違ってるのは世の方で、万石は悪かねえ、なんて言い出しましてはい。

医師　ほお、それは面白いですな。

猿又　ずい分と万石キリストのカタをもっていました。

医師　お宅はクリスチャンなんですか。

猿又　いえ、うちはナンマイダブの方ですが。

医師　ふうむ。よく分かりませんな。

猿又　はあ。

医師　それから、例の万引きですね。

猿又　へい、赤いマフラーを。

医師　もらった物だと言いはったんですね。

猿又　へい。

医師　多分、無意識のうちに盗んだんでしょうなあ。

猿又　はあ。

医師　それからえーと、例の空屋でしたね。

猿又　ええ、空屋に出入りするようになりまして、変だな、変だなとは思ってたんですが。

医師　そして、彼女のお見合いの席で。

猿又　へい．．．暴れたんです。相手の方は青木さんっていう血液センターへおつとめのりっぱな方だったんですが、こんなことになっちまって。

医師　フーム。万石キリストに赤いマフラー、お見合い．．．空家一見して何ら脈絡の無いことでも本人の頭の中では、ひとつの幻想としてつながっている事が多いんですが．．．その、空屋ってのは誰か、以前に住んでみえたんですか？

猿又　はあ、その母親の女の子と猫がね。ええ、住んでました。

医師　ほお。女の子と猫ですか、猫ねえ。ふうむ。

親方たち消える。
いつの間にか、六のところにアリスがいる。二人で焼きい
もを食っている。

アリス その血のしずくがあっという間にネズミになるの。それで
私の脳を、眼を、喰い破って引きちぎり．．．それは恐しいのよ。
六 へえー、だから猫を飼ってんのか。それで、猫はそのネズミを
退治してくれたかい？

アリス うううん、「首を横にふる」猫はなかなか私の夢ん中に入
ってこないの。もう五匹も飼ったのに、みんな別の仕事で忙しそ
う。

六 じゃあ、六匹めの猫が、早くあんたの夢ん中へ入っていくとい
いね。

アリス うん。

六 食いなよ焼きイモ。あついうちに。

アリス うん。でも私そろそろ行かなくっちゃ。

六 何処へ行くんだい。

アリス 私、婚姻するのよ。お式に出るのよ。

六 お式？

アリス そう、お式があるの。もうすぐ始まるわ。だから行かなき
や。

六 幸せになれるのかい。

アリス 分らないわ。ねえ六ちゃん。

六 何だい。

アリス これ、「と、マフラーを出す」六ちゃんにあげる。

六 これはマフラーだね。

アリス そう。これね、私の髪の毛で編んだのよ。六ちゃんやさし
くしてくれたから、これあげる。大切にしてね。

六 やさしくったって、焼きイモあげただけじゃないか。

アリス それじゃあね。六ちゃん。

六 行っちゃうのか。

アリス さよなら。

六 アリス．．．

アリス消える。六、ハッとしてグツと。

六 あ．．．アリス。あの、俺、俺何か君にしてあげることがあったんじゃないのか。ねえ、アリ．．．居ないや。『マフラーを見つめる』

と、北風万石が現われる。

北風 あ、君。君それマフラだね。うん、マフラだマフラだ。

六 オツちゃんか。

北風 おお六ちゃんか。ねえ六ちゃん、そのマフラ、またシガシガさせとくれよ。

六 シガんでどうすんだい。

北風 思い出したいのさ。わしの仕事を。

六 じゃあ、俺もシガんでみようかな。

北風 一緒にシガも。ね。

マフラーのはじっこを二人して吸嚙む。

北風 シガシガシガシガ

六と北風が消えていくと、

オーラップするようにお役所が現われる。

男たちや女たち『あの娘たちもいる』がいる。これから、

お式が始まるわけだ。おもむろに田所が血のフラスコを持って現われる。

田所 ようこそおいでやした。では本日のお式を始めましょう。皆の衆は、もう親ごさんからようお聞きになっと思ふ。皆の衆は本日ここでお式をあげられると、それぞれが婚姻したことになる。今後は誰と誰がナニをナニしてもゆるされ申すのじゃ。それは何故かと言うとじゃな、よいか人の歴史というのは血の歴史じゃ、人と人とのつながりというのは血縁ちゆうて、血のつながりじゃ。それぞれに流れとおる血は、今も昔も流れとおるもので、人はこの血でもって、御先祖様ともつながっておるわけじゃが、これは眼に見えんもんじゃ。眼に見えんもんじゃから粗末に

する。すると血は次第に穢れて人と人との和は乱れ、それは世界の平和も乱すことになる。人間はおろかなもんじゃからこれをやってきた。血を粗末にして和を乱してきたのじゃ。そこで、今一度、潔い心と体にもどって、全ての者が血と血でつながりなおすというのが、このお式なのじゃ。このお式がすめば、皆は兄弟、血のつながりのある縁者である。この血のつながりの中で、よりいっそう和を尊び、親を大切にし、先祖をまつり、この世界を一つにして生きていく。よいか、これをして、血の考古学という。血の古と、今日をつなぐ、血の考古学というのら。^{いにしえ}さき、では、お互いが血と血をつなぐ、血縁のお式を始めよう。

と、フラスコの赤い液体をかかげて、

田所　これはわしの聖なる血ぞ、こうしておまえさま方に、わしの聖なる血を分け与える。血分けの式ぞ。

洗礼のごとく、血をふりかける。

田所　血分けの式が終わると、次は肉踊るの式じゃ。わしの肉を踊らせて、女子の体内にわしの血を入れる。そして男衆は、みな、あの女に血を入れなさがよい。

と、白無垢のアリスが現われる。

田所　こうしてお前さま方の血と、わしの血はつながるのじゃ。ああ血分け肉躍る。

よいか、この式が終われば、ぬしたちは晴れて、この世の人となる。そして、一カ月の間、禁欲をしたあと、その後、それぞれはそれぞれと婚姻するのじゃ。

わしが、そこなる女と婚姻するがごとくにじゃ。
さあ、あの女に血を入れなさがよい。

男たち、アリスに群がる。そして田所は娘たちと交り始める。

アリス　ぐらありぐらあり、ぎいしぎいし。でも、突然、血のしずくがポタポタと、私の身体中に落ち始めて、全身が血まみれになるんじゃないかと思っていると、その血の斑点があっというまにネズミになるの。このネズミだけは。こいつらだけは、それは恐しい生きものなのよ。私の脳を、眼を、唇を、私の胸を、胃袋を、子宮を、内側から、あの細く鋭くとがった歯で喰い破って・・・

男たち、まるでネズミのごとくアリスを犯し始める。

アリス　母さん、私、猫が欲しい。猫が欲しいよお！！

と、六が突然ベッドからはね起きる。

六　ア、アリス、分かった。やっと分かったよ俺の仕事が。ゴメンヨ、愛をあげればよかったのに、焼きイモなんかあげちゃって。出せ、ヤロー、ここから出しやがれ。

格子をガタガタゆする。北風の姿はなく、お役所も消えてなくなっている。

白衣のパジャマ猫が現われる。まるで医師のように。

パジャマ　静かに、静かになさい、でないとまた注射をうちますよ。

六　あ、お前はパジャマ猫。

パジャマ　パジャマ着てんのはあんたの方です。

六　ここは何処だ。

パジャマ　病院です。

六　するとあんたは誰だい。

パジャマ　あなたの看護人です。

六　俺は今まで何をしていた。

パジャマ　お眠りになってました。

六　いつから。

パジャマ　ずっと前からです。

六　ふーん。ここから出たいんだけど。

パジャマ　それはちょっと。

六　病院なんだろ、俺退院するよ。

パジャマ たぶん駄目でしょう。
六 どうして。

パジャマ だってあなたが手にお持ちのものはマフラーでしょ。
六 ああ、それがどうした。
パジャマ 今は夏ですぜ。

六 夏．．．そうか、今は夏なのか。でもいいじゃないか。夏にマフラーがあったって。冬まで生きるつもりなら．．．春の枯葉、冬の花火、そして夏のマフラー、まるで俺だ。

パジャマ は？

六 いいや、何にも。チンモンカンなの。
パジャマ へ？

六、マフラーを。パジャマ猫の首に巻いてやる。ニコツと笑ってスキをつくると、そのまま締める。

パジャマ く、苦しい苦しい「倒れる」

暗 転

景 七

強い雨が降っている。

コーモリ傘をさした男が一人歩いてくる。

と、銃声、コーモリ傘がはね飛ぶ。青木の驚いた顔が現われる。

青木 ナ、何だいったい．．．と、前方に危険を察して「お、おい何だ。誰だ君は。よせ、止めろ、やめてくれ。」

青木がジリジリと下がると、フードのあるレインコートを着た人物が小銃を構えて現われる。

青木 ボ、ボクがいったい何をしたと言うんだ。や、やめないか。
男 君はネズミだ。

青木 ネズミ？．．．ボ、ボクは青木だ。

男 君はネズミだ。『撃つ』

青木倒れる。男、フードを取る。六である。

六 『空をあおいで』降り止みそうにもないな。きっと四十日四十夜降り続くに違いない。早くネズミを退治しなくっちゃ、アリスが沈んでしまう。アリス、君は何処に浮かんでいる！？

雨激しい。と、美しいパラソルの「団」がやって来て、青木の死体のまわりを囲む。

六 何だお前たちは。

パラソル 潔いけものたちで、さあ』と、パラソルをとると北風である』

六 オッチちゃん。……

北風 六ちゃん、とうとう始めたね。あんたの仕事。

六 オッチちゃんは、どうしたんだ。

北風 わしい。ごらんの通りさ。娘たちを連れてまた街を出るつもりさ。丁度ころあい良くこの雨だ。ぷかりぷかりと流れて行くさ。

六 アリスは何処に浮かんでいるのだろう。

北風 『それには応えず』おい娘たち。ネズミのまわりにあんまり近づくんじゃねえ。血でもついたらどうする。沈んじまうぞ。さあ、もう行くんだ。

娘たちのパラソル歩き出す。

北風 そうだ。そうやって濡れたアスファルトの上を浮かんで行くんだ。．．．それじゃあ六ちゃん、また縁があったらね。バイバイね。

去って行くパラソルたち。

六 オッチちゃん．．．』と見送って』アリス、君は何処に浮かんでいる。『つぶやく』

銃声して、あのお役所の課長や職員たちが次々に倒れていく。サーチライトが六をとらえる。小銃を構える六。

六 田所天助！ 何処だ？！

田所の声がする。

田所 チンドン屋の小僧か。

六 俺はもうそんなんじゃない。俺は猫だ。六匹めの、そして最後の猫だ。

田所 淋しい猫だな。

六 何故だ。どうして俺が淋しい？

田所 ふはははは。お前はもう用無しだからだよ。

六 何故だ、アリスは何処だ。

田所 方舟はすでに難破した、アリスは血の海に沈んで溶けたよ。

六、発砲する。田所の姿が現われる。

田所 お前には世界が見えんのか。

六 世界？

田所 この世界だ。血が眠りながら夢を見続けているこの世界のこ
とだ。

六 お前に世界があるのなら、俺にだって世界はある。それに俺は
眠っちゃいない。

田所 おろかよのう。世界は一つ、人類は皆兄弟じゃ。

六 俺は一人だ。

田所 さすればお前は異端の者だ。眠って連なることが出来ぬのな
ら、この世界から去れ。

六 アリスは何処だ。

田所 六よ、不思議の国などいうものは無いのだ。北風万石にも
道は二つしかない。再び難破するか、あるいはこの世界に同化し
て眠りにつくかだ。奴がこの町から連れ出した女子は、ついにア

リスではなかった。方舟はついに沈めり、だ。

六 お前はいったい何者だ。アリスを沈めたお前は、・・・お前こそネズミだ。

田所 ほほほほ・北風も、お前も、そしてアリスも、流れに浮かぶうたかたにしかすぎぬ。わしはその流れの主だ。おいなる血の流れの主よ。

六 「撃つ」

田所 消える。

田所 ふはほへほ。用無し猫め。消えよ、この世界から。ふほほへほほ。

六 アリースー！ アリース！ 何処に浮かぶ俺の方舟。答えてくれ。俺はもう俺が俺である仕事すら失くしてしまった淋しいだけの猫なのか？

と、辺りが明るくなる。そこはプロログの地下室だ。ラジオがニュースで六の脱走のことを言っている。
と、それがとぎれて、

アリスの声 六ちゃん、造反有理、革命に罪はない。

六 え？「思わずラジオを手にとる」

ラジオはもう何も言わない。六、雨を抱きしめて、

六 雨よ、四十日四十夜降り続くがいい。そして百五十日の間、水は地上に氾濫するがいい。そうすれば俺は見つけるに違いない。濁水に浮かぶアリスの姿を。そして俺はネズミを撃つ。一匹残らずネズミを撃つ。それが俺の仕事だから。アリス、俺たちは決して流れに浮かんだうたかたなんかじゃない。もっとハッキリとした何かだ。そうだ、奴等が血であるのなら俺たちはきつと骨だ。骨に違いない。眼覚めてしまった血ではなく、もう、全く違う俺たちは、起立した一本一本の骨なのだ。アリス、だから俺たちは血のようにではなく、骨のようにつながろう。アリスッ。

と、地下室が浮上する。それはあの空屋であったことが分かる。

まるで方舟のように雨に浮かぶ空屋。ぐらあり、ぎいし。小銃を構える六。と、心地よい眠りにさそいこむような声がしてくる。

声 ある日若者が猟をして山奥にはいつてゆくと、遙かな岩の上に美しい女がいて長い黒髪を梳いていた。すると、何処からかネズミの群れが現われてその女にまとわりついた。男はネズミに向けて銃を撃った。ネズミが消えてしまうと女の姿も無くその女の黒髪だけが残っていた。若者は証拠にと思って、女の黒髪を少し懷ろにいれて家路にむかったが、途中で耐えられないほど睡気をもよおし、うとうとと眠ってしまった。目が覚めると黒髪は消えており、若者はそれ以来、夢とも現とも分からぬ病におかされてしまった。

暗 転

えひろおぐ

デン子があの空屋の前にしゃがみこんでいる。猫がいる。

猿又 おーい、デン子ちゃんや、ごはんだよ。何やってんだい。

デン子 猫がいるんだよ。

猿又 猫？

デン子 うん、この空屋に猫が住みついたんだ。

猿又 へえー。

デン子 この猫、飼ってもいいかい。

猿又 駄目だ駄目だ。猫みたいな怠けもんはダメだよ。

デン子 でも、この猫、顔が六兄ちゃんによく似てんだよ。

猿又 さあ、早くご飯食べよ。

デン子 「猫を抱いて」おとっちゃん。

猿又 ん？

デン子 世界とは何だろう。

猿又 それはおまい。おとっちゃんと、デン子と、それから、この辺のことだよ。

デン子 六兄ちゃんは今、世界の外にいるのかい。

猿又 かも知れねえな。ささ、御飯だよ。

デン子 あ、おとっちゃんトンビが飛んでる。

猿又 ああ、ピーヒョロだ。

デン子 六の兄ちゃんはあるの辺に居るのかなあ。

猿又 ああ、そうかも、知んねえなあ。

デン子 ふーん。

トンビが鳴いている。

夕焼けが染みってくる。